



話題の本棚

林大地著『世界への信頼と希望、そして愛 アーレント『活動的の生』から考える』
カール・ポパー著、小河原誠訳『開かれた社会とその敵 第二巻(下) にせ予言者—ヘーゲル、マルクスそして追随者』

特集／文学の土地

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel:771-6211 / E-mail:ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/

自著解題——それでもなお、この世界を肯定するにと

世界への信頼と希望、

そして愛

アーレント『活動的生』から
考える

林大地著 みすず書房



先日、わたくし「ぼや」こと林大地は、修士論文の書籍化というかたちで、ハンナ・アーレントに関する研究書をみすず書房から刊行しました。本好きなら誰もが憧れるあのみすず書房。そんな出版社から自分の本を出すなんて夢のまた夢かと思っていました。そんな数奇なめぐり合わせか、この夢が去年、現実のものとなりました。出版が決まったとき、自室で小躍りしたのを今でもよく覚えています。そこで以下ではこの場を借りて、いささかの恥ずかしさを覚えつつ、本書に纏わるあれこれを少しお話しできればと思います。

出版に至るまで

本書のもとになったのは、京都大学に提出した二〇二二年度の修士論文。修士論文を書き終えてほっと一息ついていると、指導教官からこんな電話がかかってきました——「あの修論、書籍化したいよなあ」。最初は耳を疑いました。しかも矢継ぎ早にこんなことを言い出します——「みすず書房から出せたら最高よなあ」。そりゃ出せたら最高だけど……というのが当時の率直な反応でした。けれどもその後、編集者の方との交渉や出版助成金の獲得など、指導教官が奔走してくださったおかげで、二〇二三年四月ごろ、出版の確約をいただくことができました。本当に感謝してもしきれません。

本書に込めた想い

私が本書を通じて明らかにしたかったのはただひとつ、アーレントは『人間の条件』のドイツ語版である『活動的生』を通じて、私たちにどんなメッセージを伝えようとしたのかということです。これにたいして私は「この世界に信頼と希望、そして愛を抱いてもよいのだということ——アーレントが『活動的生』を通じて私たちに伝えようとしたのは、このあまりにも素朴な、しかしどこまでも力強い、たったひとつのメッセージである」という結論を提示しました。全体主義という暗澹たる出来事を生み出した二〇世紀という時代において、それでもなお、この世界を肯定しようとしたアーレントの姿、私が本書に刻みつけたかったのは、ほかならぬこの姿です。この結論に至るまでの過程では、労働・制作・行為という活動的生の三区分や、消費財・使用対象物・芸術作品という人工物の三区分をはじめ、誕生と死、出生性と不死性、記憶と忘却、資本主義と全体主義といったテーマも論じています。建物や書物といった「物」が私たち死すべき人間の寿命を超えてこの世界に残り続けることには、あるいは「子ども」という新たな存在がこの世界に誕生することには、それぞれいかなる意味があるのか——こうした問いに応答することで、私はアーレントの思想の核心に迫ることを試みました。

膨大な註には、哲学・思想という枠を超えて、須賀敦子や石原吉郎、フリーモ・レーヴィやミラン・クンデラ、リルケやオースワルドも登場します。彼らもまた、私の思想を形成した大切な人々です。すべてを出し切ったつもりです。ぜひお読みください！！（ぼや）

（四二四頁 税込四一八〇円 12月刊）

社会哲学の悪しき伝統を裁いた大著

開かれた社会とその敵

第二巻 (下)

にせ書者ヘーゲル、マルクスをして追隨

カール・ポパー著

小河原誠訳 岩波文庫



開かれた社会とは、自由で民主的な社会を指す言葉だ。ポパーは「その敵」——ナチズムと共産主義の、悪しき全体主義——を根本から批判する書として、一九四五年に本書を出版した。

*

本書の根底にある問いは、「この社会を良くするために社会科学は何を為すべきか」というものだろう。科学的方法論に精通した科学哲学者でもあったポパーは、社会科学・社会哲学がこの問いに取り組む際の方法にも分析を加え、それが二種に大別できるとした。社会学的方法と、ヒストリシズム的方法である。

ヒストリシズムは、歴史の本質的な意味や法則を見抜き、社会が辿る運命を予言しようとする。これこそまさに、ポパーが本書全体で厳しく弾劾する態度である。ポパーは一方の議論において、ヒストリシズムがなぜ有害で、なぜ全体主義と結びつきやすいのかを極めて論理的に述べる。そして他方では——こちらが本書の根幹にして醍醐味のだが——ヒストリシズムがなぜ生まれ、なぜ人はそれに傾倒してしまうのかを、歴史上の具体例を挙げて分析していくのである。この試みで相上に載せられたのは、大胆にも、プラトン、ヘーゲル、マルクスといった哲学史上の偉人たちであった。

ポパーによる断罪は熾烈だ。プラトンは師ソクラテスを裏切り全体主義に墮した、マルクスは社会科学にヒストリシズムを蔓延させた大罪人である、というように。しかし同時に私の目を引いたのは、ポパーの分析が彼らに寄り添い共感するような側面も持ち合わせていることである。彼はプラトンの中に、師の教えと引き裂かれる葛藤を見出し、またマルクス思想の動機と情熱を高く評価している。

そして、巨人たちの功罪が峻別されるとともに、我々の思考の中にあるヒストリシズム的傾向も暴かれる。ただ自由と平等を志向するだけでは落とし穴を免れたことにはならないのだ。国民の幸福を願う、愛情による為政。エゴを捨てた、英雄的行為や献身。本質主義、完全主義、唯美主義。ロマンチックな魅力を持つこれらの理念はしかし、民主主義、個人主義、合理主義に背を向けている。私を含め哲学に親しむ者は、特にポパーの本質主義批判に耳を塞ぎたくないだろう。本書は、科学的探究の見地からの哲学界批判でもある。

*

冒頭の問いに戻ろう。ポパーは、社会問題一つ一つに対処する社会学的方法を推奨する。この道は、あえてこう言えば、つまらなく、しんどい。人間本性や歴史の本質といった知的興奮に満ちた概念は介在しないし、社会変革の成否には歴史法則ではなく我々自身が責めを負うからだ。しかし、ひとたび自由と平等の理念を手にした我々は、この重圧から逃げてはならない。「人間は平等ではないが、平等な権利のために戦うべきだと決定することができる」。開かれた社会の担い手たる自覚を呼び覚ます、不朽の名著。(朝露)

(五〇六頁 税込一五七三円 10月刊)

〔特集〕

文学の土地

昔、地図を見るのが好きだった。道や川の形、土地の名前をでたらめに眺めては、そこに住む人たちが、風景を勝手にこしらえて自分でもそこに住んでみた。今ではもう、そんなこともあまりしなくなってしまうけれど、代わりに本を読んでいる。行ったことのない国の小説や詩のページを開くと、一瞬で心はここからいなくなつて、その土地の光、温度、匂いが僕を握える。たしかに、もっと論理立てて書かれた本を読めば、その土地について、厳密な知識を得ることはできるだろうけど。でも、あの温度や光は、「文学」でこそ感じられるものだ、とも信じてしまふ。

ここには描かれた「土地」によって選ばれた作品が並んでいる。これらの本を手掛かりに、空間をこえて、時間もこえて、その「土地」を感じてほしい。そして、もしできるならば、それをあなたと話してみたい。

暑々と日差しのもとに——アメリカ南部文学

悲しき酒場にて

なぜかみな、土地の話から始める。示し合わせてでもいるのだろうか。例えば『マック・ラーズ短編集』に収録されている「悲しき酒場の唄」ではこう、

——「さびれた町だ。

(…) この冬は短

くて寒く、夏は白熱

した太陽が燃えるように照りつけて暑い」。



土地の話から立ち上がった物語は、アメリカ南部の小さな町にあった——今ももう無い

——酒場が集う人々を描く。女主人のミス・アメリカは大柄な、男勝りの女性で、既婚者だ。「ミス」となっているのは彼女が昔、執拗なプロポーズに負けて、たった十日間だけ結婚していたからだ。そこに彼女のいとこと自称する、小男のライマンがやってくる。奇妙な外見とほろほらに人々の心を惹きつける彼によって、寂れていた酒場には人々が集い、笑い声が聞かれるようになる。無論ミス・アメリカも例外ではなく、というよりも率先して、彼に惹かれてしまふ。大女と小男の奇妙な二人組。そこに、彼女の十日間だけの夫、マーヴィン・メイシーが戻ってくる。

アメリカの嫌悪感をよそにライマンはどんどん彼に惹かれていってしまう、この奇妙な三角関係が物語の焦点だ。

愛しながらも愛されないひとびとが背景として共有するのが、アメリカ南部の暑さ、強い日差しだ。奇妙づくしの物語も、この温度と風景と結びつくことで、遠く日本にいる私たちにも、不思議なリアリティともの悲しさをもって滲み込んでくる。

遠い部屋へと還る

トルーマン・カポーティのデビュー長編、

『遠い声、遠い部屋』もまた、同じくアメリカ南部の田舎を舞台として、こう始まる。少し長めに引用してみよう。「旅行者はヌーン・シティに行くうまい方法をなんとか自力で見つけなくてはならない。というのは、その方向に向かうバスも列車も存在しないからだ。(…)そこはまた、淋しい土地でもある。あちこちに沼のような窪地があたり、オニユリが人の頭ほどもある花を咲かせている。黒い泥水の下に光る艶やかな緑色の丸太は溺死体を思わせる。その風景の中で動くものといえは、みすばらしい農家の煙突からくねくねと立ち

のぼる冬の煙が、それともこわばった翼を持つ

つ「一羽の鳥だけということもしばしばだ」
さて、「文学の土地」はあなたにも迫ってき
たのだろうか。

この小説は、母の死によって孤児となった
主人公のジョエル・ノックスの成長をめぐる
物語だ。彼はひとりでヌーン・シティにある
父親の家へと向かい、荒廃した、時間の止ま
ったような家で生活をはじめ。奴隸制や南
北戦争という、アメリカ南部がかかえる負の
歴史の気配をも漂わせるこの家だけでなく、
森の中にある隠者の住む廃ホテル、ガラガラ
蛇のいる小川、真っ暗な町外れの空き地に輝
く、年に一度町に訪れる移動遊園地など、さ
まざまな場所を経験し、ジョエルは子供の世
界という（大人にとつての）「遠い部屋」を
あとに、人生の次のステップへと踏み出して
ゆく。

初期のカポティ作品に特有な、極度に感
覚的な文章は、読むというよりも通り抜ける、
といった特殊なありかたで私たちを混乱させ
るが、その混乱を通過しおえたなら、アメリ
カ南部の空気が、あなたの脳裏にたしかに残
っているはずだ。

時代を遡る

ここまでで挙げた作品はどちらにも二〇世紀
の前半を舞台にしており、奴隸制や南北戦争
は、手を伸ばせばなんとかが届く距離にあって、

後景として作品を規定していた。次に紹介す
る短編『フォークナー短編集』に収録されて
いる「バーベナの匂い」はその過去がまだ
生々しく存在していた一八七〇年代、南部の
再建期を舞台とした物語だ。故郷の南部を離
れて法律を学んでいるベイアードのもとに、
父が殺されたという知らせが届く。旧家を代
表する息子として周囲から復讐を期待される

チベット文学——輪廻転生の一部を切り取る

一九五二年五月に中華人民共和国への併合
を余儀なくされた土地・チベット——十四世
紀以上にわたり育まれてきたこの地独自の文
化は、他者による変革の強要、そして新たな
時代のうねりに影響を受けている。

様々な外的影響に翻弄されながらも現代ま
で失われることのないチベットの伝統と人々
の心は、文学作品から読み取れる。数世紀に
わたって口承によって伝えられてきたチベッ
トの文学世界は、一九八〇年以降、チベット
語や漢語などの文字で書かれるようになる。
そして現代にいたるまで、多くの作家によっ
て時代とともに変わりゆく歴史や文化、そし
て心情が文学作品に残されてきた。

チベット仏教徒の信仰心と時代の変容

彼の懊悩と決意を、フォークナー特有のゴツ
ゴツとした語りか熱を持って伝えてくる。ア
メリカ南部文学を代表する作家である彼の作
品は難解なことで有名だが、彼の用いる手法
やモチーフが短編のポリューム（七〇ペー
ジほど）に凝縮された本作は、一気に読ませる
面白さで、あまりにも豊かな彼の作品群への
入り口として最適だろう。（コーク）

真白き鶴よ心あらば
我に翼を貸せよかし
遠くへ飛ぶにあらざして
理塘を巡りて帰らん

『タライ・ラマ六世恋愛詩集』（岩波文庫）
の最後に紡がれている一編は、ダライ・ラマ
六世の辞世の歌とも、託された歌とも言われ
ている。ダライ・ラマをはじめとするチベッ
ト仏教僧は、基本的に恋愛が禁止されている。
近年のチベット文学でも性的な表現が描かれ
ることがタブー視されているなかで、手の届
かない存在であるダライ・ラマ六世になぞら
えることで、人々はその背徳的な快楽を歌に
乗せていたのである。

そんな恋愛詩の数々は、現在も人々にも広

く知られ、影響を与え続けている。ツェワ
ン・イシエ・ペンバ『白い鶴よ、翼を貸して
おくれ』（書肆侃侃房）はこの詩の一部をタ
イトルに用いた作品だ。本書は、アメリカ人
宣教師夫妻とその息子の視点から、一九二〇
—六〇年代までの激動の時代を描く長編小説
である。未開だと認識されていたチベットの
文化と西洋社会との差異のなかで、西洋人
である一家は、チベット文化に順応していく。
そして、中国の政策によって失われゆく文化
……。人々の対話を通じて、実際にチベット
で起こった事象を背景に話が展開される。

現代と伝統の狭間で生きる人々

昨年五月に亡くなった、映画監督としても
知られるペマ・ツェテンの短編集『ティメ
ー・クンテンを探して』（勉誠出版）は、日
本でもよく知られている。本書で描かれる作
品は、生と死や伝統の喪失など、チベットに
限らない人類に普遍的テーマである。「あり
のままのチベット」を書くことにごたわる彼
の作品は、現代チベット人が抱えている社会
問題やインターネット、西洋文化に影響を受
けた現代社会と伝統の折り合いを描く。

また、同作者によ

る短編集『風船』（春
陽堂書店）では、経
済格差や性別役割分



業など、現代チベットにおける社会問題を物
語のなかに鮮やかに編み出す。表題作「風船」
になぞらえ、コンドームを風船にして遊ぶ子
どもたちの姿を表紙にしていることから、
性的な表現をタブー視するチベット仏教的伝
統が変わりゆく現状を描く。社会問題に向き
合おうとする、作者の強い意思が読み取れる。
最新の邦訳作品として、若手チベット作家
のホープ、ラシャムジャの短編集『路上の陽
光』（書肆侃侃房）が二〇二二年に出版され
た。作者は、若者の心の揺れ動きを描くこと
に定評がある。「遙かなるサクラジマ」は日
本に暮らす亡命二世のチベット人女性の話で
ある。中国に併合されてから、断続的に亡命
を余儀なくされている人々。チベットの地を
踏んだことのないチベット人も多い現代、異
郷の地で文化の狭間に生きる人々の日常と、

アイデンティティへの向き合い方を描く。

チベット文学の作品に共通する大きな特徴
として、起承転結の結が描かれないことが挙
げられる。それはまるで、輪廻転生の一部を
切り取っているような感覚である。チベット
仏教徒にとって、この人生はあくまでも輪廻
転生の一部であり、唯一のものではない。魂
の旅路に終わりが訪れないという考えが、物
語の結論を描かないというチベット文学の独
自性をうみだしているのだろう。また、当局
による規制が厳しい状況下でも文字に思いを
乗せることができたのは、比喩を使う能力に
長けているためである。これをどのように解
釈するのか、読者の価値観や知識量によっ
ても大きく異なる。読者それぞれに、曖昧に描
かれる結論と比喩を合わせて物語を解釈し
てもらいたい。（フランチ）

激動の社会を描き出す現代アフリカ文学

パリの研究教育機関コレージュ・ド・フラ
ンス。フーコーやレヴィ・ストロースなど、
名だたる知性が授業をしてきた教壇に、二〇
一六年、作家としてはじめて、ある人物が立
った。アラン・マバンク——中央アフリカ・
コンゴ共和国出身の彼が講義のテーマとして

選んだのはアフリカ文学だった。「アフリカ
文学講義」（みすず書房）はその講義録だ。

十九世紀末のヨーロッパ列強による植民地
支配は口承を中心だったアフリカの文学世界
に文字をもたらす。近代的な教育を受けたア
フリカ人エリートはフランス語や英語で書い

た文学作品を通じて植民地主義を批判した。一九六〇年代の独立以降も、多くの作家が文学を通じて変動し続けるアフリカの社会を描いてきた。マバンクの講義録である本書は、フランス語圏のアフリカ文学を中心に、一九三〇年代の文学運動「ネグリチユード」からルワンダのジェノサイドという現代的な主題まで幅広く論じており、アフリカ文学の扉を開く概説書として最適である。

昨年、小説『もうすぐ二〇歳』がマバンクの小説作品の中ではじめて邦訳された。本書に続くようにして、近年、これまで邦訳されていなかったアフリカ人作家の作品が次々と出版されている。ここではこれらの近刊のアフリカ文学作品を取り上げ、激しく変化し続ける現代アフリカの世界に迫りたい。

アブドゥルザク・グルナとスワヒリ世界
二〇二一年のアブドゥルザク・グルナのノーベル文学賞受賞は、アフリカ出身の作家として二〇〇三年のクツツェー以来二人目となる快挙だった。グルナは一九四八年に当時イギリスの保護領であった東アフリカ・タンザニアのザンジバル島に生まれ、ザンジバル革命の混乱のさなか一九六七年に一八歳で渡英した。彼の待望の邦訳一冊目として昨年末に出版されたのが『楽園』（白水社）だ。

二〇世紀初頭のドイツ領東アフリカ、一二

歳のユスフは父親の借金の形として、大商人アズィズのもとで働く。ユスフは内陸の奥地へ向かう隊商の一員となり、出会いと別れを経験しながら成長していく。

東アフリカ沿岸地域における歴史の重層性を感じさせる、複雑な社会の描写が本書の大きな魅力である。インド洋交易により移住したアラブ人やペルシャ人、アラビア語とバントゥ系の言語が混ざり合って形成されたスワヒリ語、ヨーロッパ列強による植民地化。スルタンの支配する町やインド出身のシク教徒との問答など、音やにおい、街並みや会話を通して描かれるスワヒリ世界の多様な文化がユスフの旅を彩る。一方で、白人の登場人物は一人もでてこない。ドイツにより建設された鉄道や宣教師による社会変容の語りなど、間接的な植民地支配の描写が影のつかめない不気味さを作品全体に醸し出す。

訳者解説では、本書の物語が、クルアーンをはじめとするアラブ・ペルシャの伝承やスワヒリ語文学の伝統のオマージュであることが詳細に説明されている。ここからも、スワヒリ世界の文化的背景を知ることが出来る。

ムフガルIIサールの描く現代西アフリカ

最後に気鋭の若手作家の作品を紹介する。

セネガル出身の作家、モハメド・ムフガルIIサールの『純粹な人間たち』（英治出版）

は、セネガルの首都ダカールを舞台に、ムスリム社会のタフを克明に暴く衝撃作だ。

フランス帰りの若き文学教員ンデネはある日、同性愛者の鼻を暴く動画がSNSで拡散されるのを目にする。イスラームが大多数を占め同性愛がタブー視されるセネガル社会。ンデネは騒動にまぎこまれ、当事者をはじめ様々な人と対話を繰り返す中で事件の真相に迫っていく。

遠い世界のように感じる設定だが、会話劇を追うと「文化の移入の暴力性」というテーマが見えてくる。同性愛を肯定する西洋的な価値観は、帝国主義的な侵略と同じようにセネガル社会から嫌悪感をもたれる。だが同性愛を否定する根拠であるイスラームもまた、サハラ砂漠を越えて外から入ってきたのだ。

「要するに白人の真似がしたいんでしょ。わかってないのね、あっちの、白人の世界には向いていることでも、この国にはなじまないっていうのが」——ンデネの継母の言葉が頭の中で渦巻く。日本でも同じような言葉を聞いたことがある気がして。セネガルにおさまらない本書の普遍的な問題提起を、あなたにも受け取ってほしい。



新刊コーナー

君が手にするはずだった黄金について

小川哲著
新潮社

作者と同じ名前、

似たような経歴を持つ小説家を語り手とした、一見してフィ



クシオンともエッセイともつかない短篇集である。けれども両者にいかほどの違いがあるのか——本書を通じて語られるのは、そんな「嘘」と「本音」をめぐる複雑な関係だ。

自分の人生を記述しようとして小説を書きはじめた「プロローグ」。震災の前日に何をしていたか、記憶を手繰るうちに自らの足許が寛東なくなる。「三月十日」。インチキ占い師と対決する「小説家の鏡」。詐欺師となったしまった友人の本当の姿を探る表題作。それと対になるようにして、底知れない虚無を覗きこむ書き下ろし「偽物」。さまざまに出会いや経験を通して、小説家は自分自身を顧みる。「小説家として生きる」ということは、ある種の偽物として生きるということではな

の前に現われた嘘つきたちとの違いはどこにあるのか。人はなぜ嘘をつくのか。なぜ小説を書くのか。

事実だけでは小説にならず、けれども良くできた嘘を並べたところで良い小説にはならない。単なる嘘には還元されきれない奇跡的な瞬間——そんな「黄金」を手にするために小説家は書き続ける。たとえそれが無駄に終わるとしても。明晰で飾り気がなく、エリートであることを誤魔化そうともしない書きぶりとはどうするとシニカルに感じられるが、その芯は熱く滾っている。(水炊き)

(二五六頁 税込一七六〇円 10月刊)

破流

永山則夫小説集成1

永山則夫著
共和国

「Nは寝小便をする。洋子も時々垂れた。だから蓑布団の上にはビニール布を敷いて寝た」。この一文を読むまで「蓑布団の上にはビニール布を敷いて寝る」という体験を私は知らなかった。本書に収められている作品は、いずれも著者の実体験が元になっている

る。一九四九年、戦後の日本に生まれた著者は、十九歳の歳で四人を殺害する事件を起こす。貧困、DV、ネグレクト……現代では聞き慣れたこれらの言葉の実相を読者は見ることになる。中学生時代の新聞配達を経験を書いた「木橋」、金の卵として上京した際の労働体験を書いた「土堤」、父の死を知った後、次第に希死念慮に囚われていく様を書いた「破流」。普遍的な体験の中に、永山の経験した貧困や虐待は常に暗い影を落としている。

本書にはマニユエル・ヤン氏と早助よう子氏による対談「いま、永山則夫をどう読むか」が解説として置かれている。ヤン氏の社会学者としての視点と、早助氏の小説家としての視点の双方から、著者の作品の存在意義が議論されている。本書の時代背景から始まり、孤独と芸術の関係——死刑囚の牢獄生活は風通しの悪い孤独である——という議論まで、二人の言葉の射程は広く、読み心えがある。

本書に収められた小説は、いずれも著者がその苦痛に満ちた過去と向き合って完成させた作品である。リアリズムに徹した姿勢で書かれた本書の読書体験は、平和資料館に行くことに近い。虐待や極貧生活の恐ろしさが伝わってくるのである。依然として、向き合うべき史実である。(投稿・くんとと)

(四四八頁 税込三七四〇円 10月刊)

イタリア・ルネサンス

古典復興の萌芽から終焉まで

池上英洋著

創元社

本書のコンセプトはシンプルだ。「ルネサンス」の起承転結を描く。世界史の



教科書がほんの数ページ概説するだけのイタリヤ・ルネサンスを、その準備段階から説き起こすという試みである。中心に置かれるのは「社会」と「美術」。相互に作用しあう両者を偏りなく扱う構成力が、本書をルネサンス入門の最良の書とならしめている。

周知の通り、ルネサンスは多様な要素の絡まりから生じた文化・社会現象だ。都市構造、経済、宗教——どの領域の変化も見逃さずすることはできない。著者は言う、「美術とは、水中深くで起きている社会の動きが映った水面」にすぎない。水面を知るには水中を見なければならぬ、その逆もまた然りだ。

例えば「遠近法」の解説は、社会と美術の不可分な結びつきを明晰に論じた一節である。ともに「受胎告知」を主題としながら趣向を異にする二つの絵。平面的で煌びやかな配色の中世絵画に対し、人間への関心が高まる初

期ルネサンスの絵は、遠近法によって空間が写實的に描かれている。聖書の一場面を種々しい「非日常」として表現する前者と、それを「現実世界の続きで起きていること」のように錯覚させ、見る者の「感情移入」を喚起する後者。なぜ遠近法が見出され、描画に用いられたのか？ その問いの裏には、現実世界に対する意識の変化、ひいては聖俗や空間把握に対する社会全体の変化が隠れている。

ちなみに図版の豊かさも特徴の本書。カラー版が少ないのは惜しい点だが、その分実物を見に行く楽しみが増していく。(ほん)

(三四四頁 税込一九七〇円 11月刊)

エッシャー

不思議のヒミツ

M・C・エッシャー著

熊澤弘監 求龍堂

エッシャーはトリックアートで知られる芸術家だ。上に流れていく水流、上り



続ける回廊、奥と手前が交差する塔。三次元空間に存在しえないものが二次元平面上で表現されていることに強い衝撃を受ける。矛盾している不合理な存在がもっともらしく緻密

に描かれているギャップが好奇心を刺激する。知識や美的センスがなくなるとも楽しめる芸術家、それがエッシャーだと思っ。

エッシャーと言えは前述のトリックアートや生き物を幾何学的な模様のように敷き詰めるテセレーション、そして次第にモチーフの形状が変形していくメタモルフォーゼといった奇抜な技法が有名だが、初期作品に顕著な光の表現に是非注目してもらいたい。濃淡のない白黒二色の木工版画で表現される光と影は庄巻だ。「天地創造の四日目」、「地下聖堂での行列」、「聖女スコラティカ」の挿絵たち。真つ暗な世界に光が線として広がり、黒いのに明るい印象を与えている。影の表現も素晴らしい。濃淡がないのに立体的で、平面の中に空間が見出せる。こうした光と空間への深い理解が、奇抜でありながら細部に破綻が見つかからないパドキシカルな芸術性を支えているのだろう。

本書は滋賀、富山、愛知を巡回する展覧会の図録である。世界におけるエッシャーの需要に関する巻頭論文に始まり、初期の作品から晩年の作品まで網羅し、そのほとんどに解説が付いている。テーマ毎にまとめられていたためエッシャーの試みが掴みやすく、エッシャーの新たな側面と出会えるだろう。(茂)

(二一八〇頁 税込三三〇〇円 12月刊)

多文化共生社会の

キーパーソン

バイリンガル相談員による「コミュニケーション」支援

徳井厚子著 ココ出版



日本に在留する外国人を支える重要な存在であるにも拘わらず、長らく注目されてこなかった存在——「バイリンガル相談員」がいる。彼らは「外国にルーツを持ち複数の言語を駆使しながら外国人の相談や通訳に携わっている人たち」である。本書はバイリンガル相談員たちへのインタビューを基に、具体的な支援内容をコミュニケーションの領域から考察する。また、必要とされる資質・能力を明らかにし、研修案の提案も試みる。

例えば、こんな事例が掲載されている。ある外国人相談者は解雇されて動揺し、普段は聞き取れる日本語が聞き取れなくなっていた。そこで、バイリンガル相談員は「日本語を使うのではなくて、(中略)母語でゆっくり丁寧に説明して話を聴く」ことで対応した。このように相談者が安心できる環境をつくるということが肝要だという。彼らは外国人の不安な気持ちに寄り添い、表現の仕方を変えたり、複数言語を使い分けたりするなど様々な工夫を

凝らした支援を行っている。

相談員たちが用いるコミュニケーションには「話すこと」だけでなく、「聴くこと」も含まれる。著者はこうしたコミュニケーションの在り方が、多文化共生社会において、一人ひとりと向き合うヒントを与えてくれるのではないかと述べる。支援されるだけの受動的な「外国人」ではなく、「主体的に地域をつくる」成員として日本で生きたいと願う人々は大勢いる。こうした人々と手を取り合ってゆかために、バイリンガル相談員の実態を知ることから始めよう。

(一九六頁 税込三〇八〇円 12月刊)

(前髪)

他者という技法

コミュニケーションの社会学

奥村隆著

ちくま学芸文庫



インタビューでも統計でもない——そんな社会学の魅力が十分に詰まった名著

が二五年ぶりに再刊された。奥村が目指すのは、私たちが他者と共に過ごす上で日々何気なく用いている「技法」について、その素晴らしさと苦しみの双方をくまなく描くこと。

自他の間に横たわる距離、そこに立ち現れる社会を鮮やかに読み解く不朽の一冊だ。

思いやりと陰口、外国人留学生、自己啓発セミナー……。本書では身近な題材を起点として、ゴフマンやブルデュー、レインらの議論が召喚される。特に現象学的社会学の祖・シュッツを軸に展開される第六章は圧巻だ。私たちは他者を前にして「より多くの理解」という技法で困難を解決できると思い込みがちだ。なるほど、確かに私たちは他者のことが「わからない」からすれ違っし、だからこそもっと自分を「わかってほしい」と憤慨してしまふ。そこでは、他者に対する理解の過小がコミュニケーション上の問題とされる。

しかし、と奥村は論を翻す。むしろ理解の過剰こそが問題なのではないか。完全な理解を目指すコミュニケーションは差別や暴力へと容易に転化するかもしれない。「私」の全てが理解されたとき、「私」の固有性は果たして何処にあるのか——奥村はこうした居心地の悪さにさえ自覚的だ。そして読者は気づくだろう。他者という根源的な異質性は、同時に豊かな出会いの萌芽でもあるのだ。

本書は学術書ながらも格段に読みやすい。新生活が始まる四月、他者との巡り合わせと

「わからない」を楽しんでみては。(浅煎り)
(三三六頁 税込一四三〇円 2月刊)

この村にユヰツまる

マルコ・バルツァーノ著

関口英子訳

新潮社

言葉はひたすらに無力である。特に権力や歴史の大きなうねりの前にあっては。



北イタリア、ドイツ語圏のクロン村に住むトリーナは夫と息子の三人で暮らしている。しかし、彼女にはもう一人娘がいた。大戦期の動乱の中、離れ離れになってしまった娘に向けて書かれる決して届くことのない手紙。物語はすべてこの手紙の形式で綴られる。

クロン村は常に歴史に翻弄されてきた。ムツリーニが台頭し、ファシストが力を持つようになると、ドイツ語を話す村民たちは迫害され職を失う。ナチズムが伸長すると、ドイツへの移住か村に留まるかの選択を迫られる。戦争が終わっても苦難は終わらない。戦時中に中断されていたダムの開発が再開し、村は存続の危機に瀕する。夫が反対運動を主導するが、ダムの開発は着実に進んでいく。

こうした苦難の物語が、娘に届くことはない。語られる物語はただ虚空をさまよう。誰にも読まれることのない手紙と重ね合わせる

ように、言葉の無力さが随所で強調される。「言葉はなんの力も持たないのです」「言葉にはあなた方を救う力はない」。現在クロン村は、ダム湖から教会の鐘楼が聳え立つ観光スポットとして賑わっている。風景を背に自撮りをする観光客たちが、かつて水の下にあった村に思いを馳せる時間はわずかだ。

大きな力の前に言葉は何の意味もなさない。しかし、押しつぶされてしまった人々の生活を、体験を、真実を掬い上げるのもまた言葉であり、文学である。届くはずのない手紙は、確かにそれを伝えている。(投稿・荒砥)

(二五六頁 税込三三六五円 1月刊)

アウシュヴィッツ以後の神(新装版)

ハンス・ヨーンナス著
品川哲彦訳 法政大学出版局



二〇世紀はアウシュヴィッツという絶対悪を生み出した。それは決して起こって

てはならない許されざる出来事だった。神はしかし、沈黙を続けた。ユダヤの神は歴史を支配する神であり、歴史において生起する出来事はすべて、神によって許された出来事で

ある。許されざる出来事であれば、神はその生起を妨げることができない。アウシュヴィッツの生起はしかし、妨げられることがなかった。だとすれば神はなぜアウシュヴィッツを許したのか、換言すれば、神はなぜ沈黙を続けたのか——これが本書の問いである。

本書の著者、ハンス・ヨーンナスは、二〇世紀を代表するユダヤ系ドイツ人の哲学者。環境倫理や生命倫理、近年ではとくに未来倫理の文脈で言及されることが多い。しかし本書で彼が展開するのは、すでに論じた通り、それらとは毛色の異なる「神学」的な議論である。アウシュヴィッツ以後にも可能な神概念の探求、ヨーンナスはこれを試みる。そこには、母親をアウシュヴィッツで失った彼の痛切な体験が反響している。「アウシュヴィッツの霊たちが黙せる神にむかってあげた長くこだまする叫びにたいしてなにかの答えのようなものを試みる」こと、それが責務であるとヨーンナスは語るが、その霊たちのなかにはおそらく、彼の母親も含まれていたのだろう。ヨーンナスの仕事で後世に最も影響を与えたのは「責任という原理」だろう。しかし一冊選べと言われたら、私は本書を選び取る。本書に書き刻まれたひりつゝような切迫した感情、私はそれを心を揺さぶられる。(はや)

(二二八頁 税込二九七〇円 12月刊)

風景をつくるごはん

真田純子著
農山漁村文化協会

いわゆる「のどかな農村風景」は時代とともに少しずつ形を変えてくる。人工的な

建物が建てられたり、山の斜面がコンクリートで固められたり……。そんな中、長い時間をかけて形成された地域の風景を守ろうとするのは、善いことのように思える。しかし、それは誰のため、何のため？ 本書は、徳島に住んだことをきっかけに農村風景の研究を始めた著者と、答え探しをする本である。

「風景をつくるごはん」とは、極力地元食材のみで生活し、自分の食事が田舎の風景に影響を与えることを意識するという、著者自らの試みを名付けたものである。人々の購買行動が農家の在り方を決め、農村風景を決めている。現代日本では都市と農村は非常に不平等な関係にあり、例えばスーパーで一年中きゅうりが手に入るのが当たり前なことや、都会の人の需要に農家が振り回される構造などが農業に無理を強い、農村風景を変化させ

てきたと著者は指摘する。

本書では国の施策に関する議論も充実している。EUでは、その土地で長く行われてきた、環境に配慮した農業を経済の循環の中に組み込むことが重視されている。対して日本の施策の多くは、農村地域の収入を増やすことばかりが主眼に置かれ、その土地に合った作物を生産することなどへの問題意識は薄い。「すべてはつながっている」と著者は言う。食を考へることは、風景を考へることにつながる。本書を読めば、いつものスーパーがまるで違って見えることだろう。(茫漢)

(二八八頁 税込二二〇〇円 10月刊)

生き方がラクになる

『ハイキュー!!』の言葉

アドラー心理学で読み解き心を整える
内田若希／河津慶太著 大修館書店

『ハイキュー!!』はバレーボールとバレーに関わる人を描いた作品である。9

×18mの四角の中でたまたボールを落とさないよう、必死に追って、一瞬触れて、繋ぐ。バレーはラリー中にボールを持ってないし、同じ人が連続で触ってもいけない。本常に「チー

ムスポーツ」なのだ。それに、個人の性質、歴史、思い、努力を丹念に描くこの作品では、一人一人が私達と同じ世界で息を吸って吐いている。だから彼らの言葉は生きていて、こんなに暖かく私達に寄り添い、手を引き、背中を押してくれている。これらがアドラー心理学へ人々を誘うきっかけとして著者が『ハイキュー!!』を選んだ理由であろう。

アドラー心理学は「日常使いの心理学」「実践の心理学」である。人生が困難に感じられる時に軽やかさを取り戻すための、謂わば「折りたたみ傘」。本書ではアドラー心理学の基本(他者との協力を重視する、など)を簡潔に紹介し、その後『ハイキュー!!』の言葉を基に具体的に説明していく。

例えば「俺はツアタックが嫌いだ……怖いから(中略)もしミスったらと思うと勝負できない——でも勝負に出なきゃ勝利も無い」という言葉。人はネガティブな面を大きく捉えがちだ。誰もが陥る可能性のある「勇気欠乏症」との闘い方を、『ハイキュー!!』の物語と身近な実例、そしてアドラー心理学を織り交せて著者は記す。

「あと一步」が踏み出せない。そんな時、『ハイキュー!!』とアドラー心理学は、私達が光の方へ進む熱をくれる。(黄丹)

(二六二頁 税込二七六〇円 1月刊)

言語哲学がはじまる

野矢茂樹著
岩波新書

本書は、「新たな意味をもった文を無限に作ることができ、容易に理解することができないのはなぜか」という言語についての疑問を一緒に考えるところから始まる。のちにフレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインの言語哲学を読み解くことになるが、それでも本書は言語哲学史の解説書ではなく、言語哲学入門、いやその更に半歩手前くらいの空気感で進む。この軽妙さ、どう評したものか。

著者はあちこちで、言語哲学の突飛な発想に自身が困惑する様子を見せたり、さあ立ち止まって考えてみてくたさい、と問を空けてみたり。また、読者視点での質問を想定して挟み込むことも多々。すると読んでいる私は、まるで好奇心旺盛な子どもになって優しい祖父の話の聞いているような。ちょっと賢い親戚も隣で一緒に話を聞いているような……。

つまるところ、本書は破格にやさしい。抽象的で用語も多い分野ゆえ、油断は禁物だが、語が先か、文が先か。言語が先か、思考が先か。言語の謎を、巨人の肩に乗って、いや膝の上に乗って考えられる一冊だ。(朝露)

(二七〇頁 税込二一〇〇円 10月刊)

キリストと性

——西洋美術の想像力と多様性
岡田温司著 岩波新書

宗教にはタブーが多い。たとえばキリスト教の枠組みでジェンダーについて語るのも、禁域に踏み込むに等しい危険な試みだと思っていた。男のイエスに、父なる神、最後の晩餐に揃う男の使徒たち——彼らがみな男性であることに疑念など抱いてはならないのだ。

本書が辿るのは、芸術作品にみられるキリスト教の性の揺らぎである。絵画はもちろん、映画やMVに至るまで、数多の作品で描かれてきたイエスの性は決して単一ではなかった。明らかに女性として描かれたイエスがいるかと思えば、そのイエスと弟子たちとのクイアな関係をほのめかす図像がある。性の曖昧さはさらに、キリスト教の根幹部分にも入り込んでくる。男性として擬人化されるのが通例だった三位一体の図像に、聖母マリアという女性を加えられた絵や、父なる神を女性的に記述する著作が確かに存在するのである。

本書でのびやかに思考を展開させた著者は言う——正統からはみ出した「残余」にこそ宗教本来の寛容性や遊戯性や想像力が宿っているのかもしれない。(はらた)

(二二〇頁 税込二二二円 10月刊)

現代数学はじめての一步

集合と位相数学はいかに無限をかそえたのか
瀬山士郎著 ブルーバックス

直感だけでは扱いきれない概念を、論理によって理解していくのが数学の醍醐味だ。例えば無限という概念は厄介で、人間の直感を裏切る振る舞いをするのが多々ある。実は、無限にも様々な大きさの無限がある。整数の個数は最も小さい無限であり、実数の個数は整数の個数よりも大きな無限である。一方で、整数の個数と有理数の個数は同じ無限である。こつした非自明な結果を理解するためには集合、写像、基数といった概念が必要だ。

本書の主題である集合と位相は現代数学を支え、記述するために重要な概念であるが、非常に抽象的でとっつきにくい。本書は扱う内容を無限にまつわるもの——量としての無限を比較可能にした基数と、無限の中に潜む有限性であるコンパクト性——に絞っている。目標を明確にしたうえで、抽象化された各概念を定義するモチベーションを解説しており読み進めやすい。特にユークリッド空間上の議論をベースに、抽象的な位相空間を説明してくれる構成は、具体と抽象を行き来して理解する数学の学び方を教えてくれる。(茂)

(三二〇頁 税込二二二〇円 2月刊)

ことばを集めた人々

一八五七年、完成までに七〇年以上の歳月を費やすこととなる大事業、『オックスフォード英語大辞典』（略称OED）の編纂が提案された。遡ること数世紀、大英帝国の拡大と歩を合わせ、英語という言語の影響力は世界中に広がった。時代は、自国の言語を知ること、より良くなること、そしてその権威を確かなものとすることを求める。しかし賢明な編纂者たちは、目の前にあることばに審判を下すのではなく、あるがままに記述することを使命とした。ことばは絶えず変化する。彼らは集めた用例が「それぞれの単語の一代記」を成すこと——用例でもってその語の初出と語が辿った意味変化を示す——を旨とした。この用例こそがOEDを最高峰の辞典たらしめている。加えて、この新しい辞典には、英語を使う人々が用いるすべての語がそこにあらねばならない、という壮大な理想が掲げられた。それを可能にしたのは「篤志協力者」の存在である。彼らは、世界中の老若男女に用例収集への協力を呼びかけた。

*

『博士と狂人』（ハヤカワNF文庫）は、OED編纂に関わった二人の人物に焦点を当てたノンフィクションである。緻密な文献調査に基づくこの物語は、登場人物たちを確かな輪郭をもって描写し、歴史に残るこの偉業が人間の営みであることを、そこに数多の人生があることを伝える。

一人は初代編纂主幹のマレー博士。貧しい生まれで二四歳で学校を出た後は独り学んだ彼であったが、その「ことばへの情熱」は彼を学問の高みへと導いた。人生をかけてことばを集め、定義した一人の男の情熱は我々読者に伝播する。もう一人は妄想に取り憑かれ

殺人を犯したマイナー。二人の人生は用例収集で交差する。彼は一人の篤志協力者として收容された病室から博士の要求に応えた。大半を妄想に怯えて過ごすなか、編纂事業に、ひいては社会に関与しているという実感が救いであり、孤独に知と向き合う時間は彼を妄想から解放した。両者にとってことばを集めることは人生であった。

*

OED編纂史にはある失態が残る。一つの語——bondmaidが欠落していたのだ。『小さなことばたちの辞書』（小学館）は、この史実を軸にしたフィクションである。編纂者の父に連れられOEDの写字室で過ごす少女エズメは偶然この単語カードを拾う。彼女はことばには辞典に載るものと載らないものがあることを知っていた。外されたことばを拾い集めるエズメはやがて、博士の家の女中、市場の女たち、文獻に残らない彼女たちのことばをカードに書いて集め始める。少女から大人へ、彼女もまたことばを集め続けた。

時代は女性参政権運動の興隆期。OEDは編纂者たちから見える世界を彼らのことばで記述したものだ。そこに彼女たちのことばはあったらどうか。ことばを集める人々は「どう定義されるか」を問い続ける。やがてその対象は自分に。彼女たちは「辞典」の行間に生きていくと言った。本書もまた多くの文献調査に基づく物語である。ただし、フィクションにならざるを得なかった。膨大な記録の行間にある、文獻に記録されなかった者たちの物語だ。

*

OEDは今尚改訂を続ける。変化することばを記述し続けるこの辞典はいつか真にすべての語が載る辞典となるだろうか。（ひるね）

テオドルス・ファン・ゴッホへの手紙

親愛なテオ

初めまして。私は貴方が亡くなってから百年と少し後に生まれた者です。貴方と貴方のお兄さんであるフィンセント・ファン・ゴッホのことを描いたある本と出会い、眼前が真白な光で満ちるような風が吹き抜けるような、強烈な心の振動を味わいました。その後、画集や書簡集などに身を浸し、脈を打っているような絵に引きずり込まれ、瑞々しくて痛切で、詩的で美しく実直なフィンセントの手紙に、暗く静かな夜に青白い燈明を掲げ、土の上を裸足で、彼と共に歩き続けているような気持ちになりました。勿論彼の心にずっと寄り添い続けてきた貴方も。そして、私は貴方方に手紙を書きたくなりました。時代の先を行き過ぎ受け入れられなかった貴方方の苦しみが痛い程伝わってきて、貴方方を愛している人が沢山いることをお伝えしたいと思っただけです。今から、貴方方のことを綴った本を紹介いたします。これらは貴方方へ宛てた「手紙」です。

『テオ もつひとりの「ゴッホ」(平凡社)。九八通に及ぶ未公開書簡を駆使することです。これまで「ゴッホの弟」「天才の脇役」として伝えられてきた画商テオドルス・ファン・ゴッホの実像に光を当てた、初の評伝です。神父であるお父上と彼を支えるお母上は、世間に溶け込んだ生活を愛された。それ故フィンセントの、例えば身ぐるみ一切を貧困に喘ぐ人に与え自分は裸になることを選ぶような病気の娼婦を妻とし猷身的に支えようとするような激しく非凡な生き方を心配し、また距離を置きたかった。結果彼らの期待は貴方方に一身降りかかり、家族全体を金銭的に養うこととなった。ご両親や他の兄弟とフィンセントの間に立ち、物理的・精神的に一家の支柱

であった貴方は余りに優しく、のしかかるものは余りに重かった。

一家を支え「生きる」ために選んだ画商の仕事で貴方は天賦の才を示した。しかし芸術を愛し、当時まだ「毛羽だったような絵筆で書き殴ったおぞましい絵」という烙印を押されていた印象派や、さらにその先を行くフィンセントら「新しい時代の絵」に心を震わせる目を持っていた貴方は、アカデミアに染まった保守的な職場で追い詰められていった。「兄の非凡さを理解し、彼の言いたいことを捉えるには、まず、既成概念からすっかり解放されないといけない。だから(兄が)理解されるとすれば、後世になってからだろう」。

貴方の言うことは本当に正しく、貴方方の死から約六〇年後、小林秀雄は、フィンセントの絵の前でしゃがみ込んで「たとえ『ゴッホの手紙』(新潮文庫)で述べられています。『僕が一枚の絵を鑑賞していたという事は、余り確かではない。寧ろ、僕は、或る一つの巨きな眼に見据えられ、動けずにいた様に思われる』と。小林がフィンセントの絵を綴る文章はフィンセントの手紙の空気感と似通っていて、熱を帯び澄んだそれを読み私は、彼はフィンセントと同じ時を生きていても彼に心からのめり込んだだろうと思いました。

最後に、私を貴方方の元へ導いてくれた本は『さよならソルシエ』(小学館)です。歴史をひっくり返すようなこの本の詳細をここで語ることはできませんが、一言、この本を読んで、私は貴方方を照らした陽光を、髪を撫でた風を、確かに感じたように思います。

貴方方が遺したものは、この先も本当に多くの人たちの心を揺さぶり、「生」の実感をまぎらわすことなのでしょう。

心からの握手を。(黄丹)

編集後記

綴葉編集委員になって三年近く経つ。本はずっと好きだが、いまだに読むのも書くのも遅い。旅行の道中に必死で本を読み進めたり、研究発表と原稿の締め切りが重なってヒーヒー言いながら書いたり、とにかく苦労した記憶ばかり蘇る。

意外と一番苦戦していたのが、取り扱う本を選ぶ作業かもしれない。私の専門分野で最近話題になっている本、長期休みにおすすめの本……客観的に見て扱うべき本が思い浮かぶ一方で、「いま難しすぎる本はちょっとな」とか、「あんまり小説の気分じゃないんだよな」とか、私の心がわがままを言う。

例えば最近でいうと、1、2月号の『鬱の本』は修論の山場を越えてへとへとの心で、縋るように手に取った。引越しのための荷物整理をしていて、用途の不明瞭な「雑貨」的なものの多さにうんざりして興味を持ったのが3月号の『すべての雑貨』だった。

毎月書評を書いているとはいえ、本業は学生である。私の選ぶ本には、学生生活を通じた私の心の動きが、どうしてもちょっとずつ反映されている気がするのだ。だけど、それが面白さなのかもしれない。私の、大学院生としての日々の心の動きが捉えた本が、少しでも誰かの心に響いていたら嬉しい。(茫漠)

当てよう！ 図書カード

特集「文学の土地」でアフリカ文学を取り上げました。アフリカ文学といえば、南アフリカ出身のノーベル賞作家クツツェーは外せません。ここで問題。南アの公用語の一つでクツツェー作品にも頻出のアフリカンス語は、何語が派生してできた言語でしょうか？

1. フランス語
2. ドイツ語
3. ポルトガル語
4. オランダ語

(たいやき)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは5月15日です。



《12月号の解答》 12月号の問題の正解は、2.の伊予美人でした。この伊予美人は、白くきめ細やかな肉質と丸い形が特徴です。里芋を使った愛媛の郷土料理「芋たき」についてもぜひ調べてみてください。図書カードの当選者は、ヤキトリさん、北大路優馬さん、んぬさん、スマレさん、えび天天さんの5名です。当選おめでとうございます。(はらん)

読者がらひひひひ

〇二月号・編集後記の「三天まつり」、私も全て訪れましたが、ほぼ皆動賞とは脱帽です。編集委員の皆さんの「古本で買って良かった本」(絶版多めで(笑))を知りたいです!!

(農学部・レチデント)

——いつも本誌を手にとっていただきありがとうございます。古本でこそ出会える一冊がありますよね。あと、古本は質感も魅力の一つかと思えます。私の知人には古本独特の匂いが好き、という人がいますが、みなさんはどうですか？ ちなみに、私の買ってよかったと思う一冊は、多田智満子さんの随想集『神々の指紋』(平凡社ライブラリー)です。海の向こうに思いを馳せながら読みました。〇編集委員に興味がありますが、スケジュール上なれないので書評の投稿をしてみようかなと思いました。

(農学部・すみれ)

——興味をもっていただきありがとうございます。お忙しいなか、こうして本誌をお読みいただき、さらには感想までいただけることが編集委員の励みになっています。読者の方々からのコメントを毎度ほんとうに楽しんでいますので、投稿もお待ちしております。不明な点はお問い合わせください。(はらん)